第 12 期生　卒業エッセイ

“小野ゼミ生”になるために

第 12 期　荒井 礼

卒業エッセイを書こうとパソコンに向かうといつも，ワードファイルを閉じ，過去の会誌を何冊分も読み漁ってしまう。先輩方のエッセイは，時間を忘れて読むことに没頭させ，感動させる。そして，必ず自分にこう考えさせる。「自分は，偉大な先輩方のような，“小野ゼミ生”になれたのだろうか」。

思えば，自分が小野ゼミで頑張る原動力は，常にこの問いから生まれていた。2 年生のとき，何気なく立ち寄ったオープンゼミで繰り広げられる先輩方のディベートを見て，鳥肌を立てて感動した記憶は今でも忘れない。そのときから，“小野ゼミ生”になりたいという気持ちは始まっていた。

入ゼミ試験で，「君を小野ゼミに入れるメリットが分からない」。こう先生に言われつつも，なんとか形だけ“オノゼミ生”になった私だが，入会して早々に大きな失敗をした。周りに認められようと立候補した KUBIC で，良い案が思いつかないばかりか，ホウレンソウもろくに出来ず，先生をはじめ，多くの人に迷惑をかけたのである。自分なりに心身を削って努力したにもかかわらず，結果に結びつかなかったことが，悔しくてたまらなかった。

私が 2 年生の頃から抱いている“小野ゼミ生”のイメージは，堂々としていて，頭がキレッキレで，どんな困難にも果敢に挑戦する，一言で言えば，カッコいい存在である。少しでも“小野ゼミ生”に近づけるようにと，KUBIC 後は，目の前のことを一つひとつ頑張った。海外の学会で発表する先輩たちをカッコいいと思えば，英論チームを希望し，海外で発表した。ディベートのまとめがカッコいいと思えば，オープンゼミのディベートにてまとめに挑んだ。卒論で商学会賞を取ることがカッコいいと思えば，商学会賞の投稿にこぎつけた。

しかし，まだまだ自分は，“オノゼミ生”である。なぜなら，英論，ディベート，商学会賞，どの活動においても多くの先輩方や同期，そしてなにより小野先生の御助力に依存しているからである。それに加えて，未だ，13 期生や，オープンゼミにきた 2 年生に，私が先輩から受けたような，心を動かす何かをきっと見せてあげられていないからである。たぶん，小野ゼミに所属している間は，“小野ゼミ生”のようなカッコいい存在にはなれないかもしれない。けれども，この 2 年間で，「こういう人でありたい」という理想像は，私の中で明確にすることができた。来年からは，小野ゼミが与えてくれた理想像に一歩でも近づけるように邁進し，いつしか OBOG 会や OBOG 会誌で，「この先輩，さすが“小野ゼミ生”だわ」。と思ってもらえるような社会人になりたい。いや，ならなければならない。未来の小野ゼミを担う後輩のためにも。